携帯電話が鳴った時

野上鷹飛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
携帯電話が鳴った時

【Ｎコード】
Ｎ９６８６Ｕ

【作者名】
野上鷹飛

【あらすじ】
携帯電話が鳴った時、電話に出るのは当然のこと。その電話に出ることで、その後の人生が変わるのは大げさだと思うでしょうか。飲み会に誘われたり、あるいは野暮用を押し付けられたり・・・。自分にプラスになることばかりではないのでは。

携帯電話が鳴った時、俺はマンションの一室で転寝をしていた。
携帯電話の着信音で飛び起きた。発信者は、高校時代の同窓生だった。今思えば、その電話に出たことが間違いだったのだろう。電話に出ることを億劫に思って、そのまま放置しておけばよかったのだろう。普段の俺ならば、そうしていただろう。なぜその時に限ってそうしなかったのか、それは気まぐれ以外のなにものでもないだろう。発信相手は、対して親しくもない、同級生。特段会いたい奴というわけでもなかったのに。

山井修一は居酒屋の個室のテーブルで突っ伏すようにして鼾を掻いていた。山井修一という名前は予約していた男の名前だった。また一緒に飲んでいた友人が彼のことを修一、と言っていたのが耳に入っていた。
居酒屋の女将は突っ伏した客に目をやり、溜息をついた。残る客は彼一人なのだが、起きる様子はない。閉店時間が近いこともあり、女将は仕方なく男の体を揺すったが、男が目覚める様子はなかった。女将が困り果てたように表情を崩すと、山井の友人らしき男が女将に礼を言った。その男が、トイレの場所を訊いてきていたことを思い出した。席を立っていたのは、3分ほどだっただろうか。その男は三浦尚吾と名乗った。
「すみません。こいつ酒に弱いくせに飲みだしたら止まらないんで」
紳士的な態度だった。山井とは大違いだな、と女将は思った。

三浦は酔って潰れた山井に肩を貸して、山井のマンションの近くにある公園のベンチまで歩いた。
その公園からは山井の住むマンションが見えた。オートロックで防犯もしっかりしているマンションだということを、山井から聞い

ていた。
三浦が腕時計をみると、長針と短針が重なっていた。そろそろだな、と三浦は誰もいない闇に向かって呟いた。
何度も根気よく体を揺すったためか、山井は目を覚ました。まだ完全には覚醒しきっていないのか、目がトロンとして焦点が定まっていなかった。予め公園の中のある自動販売機で買っておいた、ミネラルウォーターを山井に渡した。キャップを外すと、山井は一気に半分ほど飲みほした。口から垂れたミネラルウォーターを袖で拭っていた。
「やっと目が覚めたか」
状況を理解できない山井に、三浦は声をかけた。
「何でこんなところにいるんだ。居酒屋で飲んでいたじゃないか」
「お前が飲み潰れたから、ここまで運んできたんだよ。運んできたといっても、数百メートルしかないから、そこまで気にすることはない」
「そうか。すまなかったな」
「気にする必要はないといっただろ。お前の家の近くの公園だから、もう一人で帰れるだろう。俺は帰るからな」
「ああ、もう大丈夫だ」
三浦が立ち去ろうとする前に、山井はポケットから財布を取り出した。
「勘定、いくらだった。お前が立て替えてくれたんだろう。あと、このミネラルウォーター代」
律儀な男だな、と三浦は思った。「今日はいいよ。俺が誘ったんだし、次の機会に頼むよ」
言いながら次の機会は永遠に来ないだろうな、と思った。さすがにそれを口にすることはなかった。
山井はそうか、といって素直に財布をポケットに戻した。
三浦は山井を極力見ないように気をつけながら、公園を出た。山井がミネラルウォーターを飲み干す音が聞こえた。

山井は三浦から受け取ったミネラルウォーターを空にすると、それをゴミ捨てに放り込んだ。カラカラと小さな音をたててゴミ箱に収まった。

それを確認して公園を後にした。数分前に立ち去った三浦の姿はすでになかった。

三浦は山井の中学時代の知り合いだった。特に仲が良かったわけではなかったため、飲みに行こうと誘われた時には意外な思いだった。彼が自分のことを誘うなど今でも信じられないな、と山井は思った。住んでいる場所だけは伝えていたので、近くまで来たからと、久々に連絡したとのことだった。マンションのロビーで待ち合わせ、そのまま居酒屋へ向かった。数年ぶりに再会した三浦は、少しばかり贅肉がついたように見えたが、そのキリリとした容姿は変わっていなかった。

三浦は卒業後も多くの同窓生と繋がりがあるらしく、懐かしい面々の近況を教えた。酒には強くない山井だが、彼の話を聞きながらいつもより多くの量を摂取していた。三浦に勧められて止まらなくなっていたというのがいいかも知れなかった。三浦は酒に強いらしく、自分も飲みながら山井にも勧めた。三浦の話に煽られ、三浦のペースに合わせようとしたのが間違いだった。気がついた時には三浦に体を揺すられていた。

のんびりとしたペースでマンションに向かった。頭の中では、三浦との居酒屋でのやり取りが再生されている。懐かしい思い出に浸れたいい時間だったと思った。部屋の前で鍵を取り出して解錠して部屋に入った。

一瞬、部屋を間違えたのかと思った。部屋の中は空箱のようになっていた。家具のほとんどが消えてなくなっていた。何度表札を見てみても、山井と書かれた表札はそのままだった。呆然と室内に足を踏み入れた。靴を脱ぐことを忘れて、土足で入ってしまったことに気がついたのは少し時間が経ってからだった。山井は携帯電話の

呼び出し音で我に返った。空き巣に入られたと自覚したのはそのときになってからだった。

携帯電話が鳴った時、彼はフローリングの上に崩れ落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9686u/

携帯電話が鳴った時

2011年7月18日03時16分発行